

ナサニエル・ホーソンとフェティッシュ

木村 信一

『緋文字』の序章にあたる「税関」(“The Custom-House”)の冒頭には、アメリカ文学市場に出現した読者大衆といかに向き合うべきかというアメリカの職業作家第一世代に共有された課題について、ホーソン流の手の込んだ記述があるが、そこで主要な話題となるのは、彼のなかの「自分自身を語りたいという衝動」(autobiographical impulse)である。世の作家のなかには、まるで「彼自身の本性を分かちもつ分身」に向かって語るかのように「心の奥の秘密の告白」を試みるものもいるが、「すべてを語ることは礼儀に反する」。せめて「親切で理解力のある友」を聞き手として想定することが許されるなら、自分自身について腹藏なく「お喋り」(prate of)しながら、「それでも最も内奥の『私』はヴェールの陰に留めておく」(but still keep the inmost Me behind its veil) ことができるかもしれない(3-4)。「大文字の私」(Me)の素性は不明だが、少なくともそれは、ホーソンが求める「語り手と聞き手のあいだの何らかの実のある関係」(4)のなかには位置づけることができない何か、である。加えて、“behind its veil”のitsはMeを指示する以上、ヴェールを身に着けるのは、いま語っている「私」ではない。読者にとってのみならず、ホーソン自身の視点から見ても、それはヴェールの向こう側にある何か、である。

「大文字の私」は、1841年の9月に、ホーソンが新妻ソファイアに宛てた私信の一節にも姿を現す。結婚を控えたホーソンが、フーリエ主義ユートピア共同体であるブルック・ファームに参加し、半年ほど、そこで晴耕雨読の日々を送ったことを回想する一節である:「あれは、いまとなっては、ずっと昔に見た夢だったかのように思われます。『本当の私』(the real Me)は共同体の仲間ではなかったのです。あそこには『幽霊』(spectral Appearance) だったので、その『幽霊』は明け方に角笛を

吹き鳴らしたり、牛の乳を絞ったり、鋤でジャガイモを掘ったり、熊手で干し草を集めたり、炎天下での過酷な労働に従事しながら、しかも、そいつは、名誉なことに私の名前を騙っていました。しかし、そいつは私ではなかったのです」(The Letters 566)。

「本当の私は共同体の間ではなかった」というのは、わずか半年ほどでブルック・ファームのプロジェクトから脱退したことへの言及だが、コミュニティの同志として生活する自分を「幽霊」に喩え、その「幽霊」が「私」の名を騙ってブルック・ファームでなしとげたことは「私」にとって名誉である旨、ホーソーンは皮肉をこめて書いている。しかし、残念ながら、「そいつは私ではなかった」のである。いわゆる「私」とか「自己」というものが社会関係のなかで演じられる虚構でありうることを前提に、「大文字の私」は、そうした共同体の関係のなかには位置づけられず、労働がもたらす名誉に与ることもなく、「幽霊」ではないものとして、否定の構文のなかで大書されうる何か、である。加えて、“a spectral Appearance”は、Appearance と Reality というプラトンの二項定立を想起させ、同じく大文字で表記される the real Me が、Appearance の対立項であることを示唆する。

他方、R.W. エマソンは、1838年の講演原稿“Being and Seeming”のなかで、新しく生まれた共和政社会における個人の在り方について、やはり「外見と実在」の二項定立に依拠しながら、次のように書く：「たった一人で生きていくかぎり、人はけっして馬鹿なことはいし、見栄を張ることもなく、つねにひたむきに生きる。『社会』が生まれるときに、同時に『見せかけ』が生まれる。子どもは誠実であり、大人も一人きりのときは正直だが、そこにもう一人が登場するや、偽善が始まる。」(Emerson 296)

社会関係のなかで虚構される「私」の寄る辺なさにたいして、個人が本来的に備えている「ひたむきさ earnestness」が提示され、それらは、「在ること」と「見せかけること」の対立として、説明される。個人主体は、

そのものとしてはひたむきだが、社会関係のなかにおかれるや、見せ掛けが生まれる。エマソンの代表作「自己信頼」(“Self-Reliance”)へと向かうルールがすでに明確に敷かれていることがわかるが、エマソンにおいては、まずは、ひたむきに在るものとしての個人が登場し、その後に社会が遅れて登場する。ここでは、社会的他者は、「私」にとっての「もう一人」(the second person)として登場するのであって、the first personはあくまでも「私」なのである。「私」に本来備わっている「ひたむきさ」、「誠実さ」は、「もう一人」あるいは「社会」の登場によって損なわれ、「私」は、ひたむきに「在ること」から「見せかけること」の虚構へとずらされてゆく。

しかし、現実の順番がその逆であることも事実であって、個人は、特定の社会とその歴史のなかに生れ落ち、他者は、常に個人の誕生に先立ってすでに登場している。「ホーソーンはトランセンデンタリストの心性を社会化する」というジェフリ・スティールの言葉にもあるように、「内なる神」(God-Within)にたいするエマソンの自己信頼を、ホーソーンが共有したことはなかった。ホーソーンの「大文字の私」は、あくまでも大いなる他者としての社会との関係において成立する個人主体に関わって、その主体性の抛り所となりうるものにたいするホーソーンの模索を跡づけるものとして理解すべきである。ホーソーンの「大文字の私」は、他者にたいしてヴェールの向こう側に隠されているべき何かであると同時に、「税関」の語り手である「私」にとってもヴェールの向こう側に隠されている何かであって、「私」と他者とのあいだの双数的な関係のなかに取り込まれることも、「私」とその分身＝鏡像とのナルシスティックな差し向かいのなかに取り込まれることもない何か、なのである。

また、ここで用いられるヴェールの比喩についていえば、『緋文字』の上梓に先立って発表されたホーソーン最初の短編集である *Twice-Told Tales* (1835) 所収の短編「牧師の黒いヴェール」(“Minister’s Black Veil”)では、素顔をヴェールで隠し続けるフーパー牧師のパフォーマンスをめぐる顛末が語られる。若手で独身のフーパー牧師が、日曜の礼拝に

突如、黒いヴェールで顔を隠して現れる。ヴェールは、隠さなければならぬ「私」がヴェールの向こう側に現前しているという幻想を人びとのなかに産み出す。のみならず、ヴェールを着けたフーパー自身が同様の幻想に深く捕らわれるのであって、たまたま姿見に映し出された己の姿を垣間見たフーパーは、危うく正気を失いかける。村人たちには理由もなく恐れられ、許婚にも捨てられるが、これを境に、フーパー牧師の説教にはかつてない説得力が加わり、牧師としての名声は津々浦々に知れ渡って、選挙日説教を任される栄誉すら手に入れる。彼の遺体はヴェールで顔を隠したまま棺に収められるが、物語は、次のグロテスクな一節で結ばれる：「善良なフーパーさんの素顔が、黒いヴェールの陰で腐っていったと考えると、いまでも怖気立つのです！」(Twice-Told Tales 53)

フーパーの素顔を隠すはずのヴェールが、あべこべに、その向こう側に、ありもしないフーパーの恐ろしくも不思議に蠱惑的な素顔の現前を映し出す。その機制については、村人もフーパー自身も、制御する術をもたない。いずれにせよ、ヴェールはフーパー牧師を「化け物」(a bugbear) (48) に仕立て上げる一方で、彼を「有能な牧師」に仕立て上げ、彼がそもそも持ち合わせていないはずの「畏怖すべき力」(awful power) と威圧的なプレゼンスをフーパーに与える (49)。

さて、こうしたヴェール特有の働きについては、ジャック・ラカンが、フェティシズムに関わって述べているところに重なる。ラカンは、フェティッシュの働きをヴェールないしスクリーンに準えつつ、フェティッシュとは、その向こう側に欲望の対象が現前することを主体に教唆するひとつの象徴である、という。

ここに主体が、そして、ここに対象があります。さらに、無であるところの向こう側があります。これは象徴であり、あるいは女性に欠けているという限りでのファルスです。しかし、幕がここに置かれると、その幕の上に何か描かれ、対象は向こう側にある、と告げることに

なります。その場合、対象が欠如の場を占めることもあれば、対象自体が愛の支えとなることもあります。しかし、いずれにしてもそれは、対象が欲望の結びつく点そのものではないという限りにおいてです。(ラカン 198)

ラカンの論考はフロイトに依拠するところが大きい。フロイトが最初にフェティシズムに言及するのは、1905年の「性理論のための三篇」においてだが、「性対象の不適切な代用、フェティシズム」の項目で、フロイトは、文化人類学用語としてのフェティッシュ、「未開人がそのなかに自分たちの神の具現化を見るフェティッシュ」を精神分析学に導入し、それを新たに意味づけることの正当性を主張する(フロイト6 196)。ついで、1927年の論文「フェティシズム」のなかで、フロイトは、フェティッシュが母のペニスの代理物であることを述べた上で、女性=母の去勢という事実について承認と「否認」(Verleugnung/disavowal)という相矛盾するふたつの心的態度を同時に保持するもの、両者の「妥協」を可能にするものとして、フェティッシュを説明する(フロイト19 313-14)。ラカンの言葉を借りれば、フェティッシュは、母への／母の欲望にたいして突きつけられる「父の名／否」、すなわち、象徴的去勢の徴として機能すると同時に、主体の欲望の対象である母のファルスの現前を、幻想において保持するものでもある。母との想像的な同一化から父との象徴的な同一化へ移行するエディプスの機制において、主体がその移行途上の一地点に停止し、その地点に固着していることを、フェティッシュは明らかにする。いいかえれば、フェティシストは、母の去勢という事実および自らの象徴的去勢を受け容れながら、同時に、母の想像的なファルスを幻想において保持し、フェリック・マザーとの想像的な同一化の可能性を温存する。欲望の対象の現前がヴェールの上に浮かび上がる以上、欲望する主体の現前もまた、ヴェールの向こう側に想像的に保持される。ただ、ラカンが付け加えるように「対象が欲望の結びつく点そのものではないという限りにおいて」であって、

主体が対象に同一化する余地は、主体自身によって最初から否定されている。ヴェールの向こう側にあつて主体の欲望の原因であり続けるのは、あくまでも母に「欠如」するものとしてのファルスであつて、母のファルスの現前ではない。

精神分析的知見がフェティシズムのすべてを説明するものではなく、文化人類学用語としてのフェティッシュも依然として有効であり続ける。ただ、フェティッシュをめぐる「否認」という心的な機制をめぐるフロイト・ラカンの知見を念頭において、緋文字に関わる問題系、ホーソーンの「大文字の私」に関わる問題系を考える余地はある。

ホーソーンと実母の関係についての伝記的検証に基づき、ニーナ・ベイムは、ヘスタの人物造形においてはホーソーンの実母にたいする強い執着が中心的な役割を果たしていること——『緋文字』の物語が意図するところは、「その女主人公を死の忘却から救い出し、生前に彼女が被った不当な扱いを是正する」ことにあること——を示唆する (Baym 21)。これを受けて、ジョアン・F・ディールは、「作者の自己 (the authorial self) と彼の失われた母のあいだのはるかに両面価値的な関係」に注目しつつ、この物語の意図は、「息子を彼の母親のもとに復帰させること」「愛人／母親としてのヘスタにたいする作者の深い葛藤を暴きだすこと」にあると主張する。その際、ディールは、緋文字のフェティッシュの機能——「Aの文字が、欲望のシニフィアンとして機能すると同時に欲望を否定する徴として機能すること」——に着目する (Diehl 656-57)。

本稿では、作者の伝記的検証は保留して、フロイト・ラカンの精神分析的知見に依拠しつつ、緋文字のフェティッシュ性、とくにフェティシズム特有の「否認」のレトリックを『緋文字』のテキストのなかに改めて跡づけながら、緋文字というフェティッシュにホーソーンが託しているものについて、ホーソーンの「大文字の私」との関連において考えたい。その際、『緋文字』についてサクヴァン・バーコヴィッチが行なった一連の新歴史主義的な論考も踏まえ、フェティッシュの問題を、もっぱら「ファミリー・ロ

マンス」の閉鎖回路のなかにおくのではなく、個人主体と社会との関わりにおける事象として、捉え直してみたい。

『緋文字』は、ディールの論文のタイトルにもあるように、四人の主要人物のあいだで演じられる葛藤劇、ファミリー・ロマンスとして読むこともできる。ディムズデルの愛人であると同時に比喩的にはディムズデルの母の位置をも占めるヘスタ、ヘスタの愛人であり比喩的には彼女の息子の位置をも占めるディムズデル、ヘスタの法的な夫であり比喩的にはディムズデルの父の位置をも占めるチリングワース、そしてヘスタとディムズデルの道ならぬ愛から生まれたパールという主要人物が、緋文字 A との関係をそれぞれに取り結びつつ、各自各様の物語を紡いでゆく。とはいえ、「税関」のなかで、ホーソーンが構想段階の『緋文字』の物語を「ヘスタ・プリンの物語」(34)と呼んでもいるように、この物語は、一義的には「緋文字」の物語であると同時に、ヘスタの物語でもあるということに、異論の余地はないだろう。

物語の冒頭、「広場」(“The Market Place”)における裁きの場で、ヘスタは自らの欲望にたいする「父たち」(fathers)の「名／否」を受け容れ、自らの象徴的去勢を承認するのだが、それは、ヘスタの欲望する主体を抹消し、「恥の象徴」(the type of shame) (79)である緋色の A として、ヘスタをボストンの法秩序のなかに組み入れることを意味する。以降、ヘスタは、「不倫女」(Adulteress)の換喩である A の女として、ボストンの法秩序のなかに登録されることになる。

第5章は、このあたりの経緯を詳らかに語る。第二パラグラフの冒頭には、ホーソーン特有の長大な一文がおかれるが、きわめて手短な主節では、ヘスタは、「恥の象徴を生きなければならない」(she must needs be the type of shame) ボストンを、あえて彼女の故郷に選ぶことのみが語られる。簡潔な主節の前には、ふたつの長い分詞節がおかれ、そこでは、ヘスタに下された判決が彼女に保証している移動の自由の中身が述べられる。移動の自由のひとつは、旧世界に戻って「別人に生まれ変わったかのよう

に完璧に」自らの素性を隠して生きる自由であり、もうひとつの自由は、目の前に広がる森の奥深くに立ち入って「彼女を断罪した法律とは無縁の習慣と生活を送る種族」とともに暮らす自由である。なお、この分詞節には、「ヘスタの奔放な資質はその種族と容易に同化するかもしれない」(the wildness of her nature might assimilate itself with a people) というコメントが付け加えられている (79-80)。

『緋文字』の舞台設定は、「広場」と「森＝荒野」という象徴的な場の二極の構図を下敷きとする。主要人物は、例外なく、各自各様の事情のなかでふたつの場を行来するが、それぞれの場が帯びる象徴的な意味合いについては、基本的には、また、とりわけヘスタの物語においては、「森＝荒野」は掟からの自由、欲望の自由の可能性を表象し、「広場」は欲望の禁止＝法の支配を表象する、とあってよい。加えて、上の引用にもあるように (これから見るように)、ヘスタと「森＝荒野」とのあいだの親和性は、物語のなかで繰り返し言及される。判決がヘスタに許容するふたつの自由の選択肢は、「自分を自由にするを彼女の運命、運勢の趨勢」(199) とするヘスタの資質が、本来、選び取るはずの選択肢として提示されるが、そのことは同時に、ヘスタがあえてその自由を断念し、ボストン永住を決意したという事実の重み、すなわち、父性メタファとしての緋文字を受け容れるヘスタの決意の真剣さ、「父たちの名／否」の正当性を承認する彼女の決意の硬さを、殊更に際立たせることになる。

さらに、パラグラフの後段では、ホーソーンは、ヘスタのボストン永住の決意のほどを、ピューリタンの教義に関わる「回心」(conversion) と「新生」(the new birth) の語を用いて強調する：“It was as if a new birth, with stronger assimilations than the first, had converted the forest-land…into Hester Prynne’s wild and dreary, but lifelong home.” (80) ヘスタが緋文字 A として「生まれ変わる」ことが、異教徒の住む「森の国」アメリカを、ヘスタの贖罪の地へと「生まれ変わらせる」ことになる。さらに語り手は、ヘスタが、それ以前の「私」にも

増して「恥の象徴」としての「私」に「強く同化する」(with stronger assimilation) ことを、ピューリタンの回心体験に準えて付け加える。

しかしながら、続く第三パラグラフでは、語りのトーンに変化が生じる。ヘスタがボストン永住を決意した理由は、象徴的去勢の徴としての緋文字を受容するという固い決意だけでなく、ディムズデールへの断ちがたい欲望でもあることが追記される。ディムズデールとの共犯の「絆」(a union) が、二人を最後の審判の場に引き立て、「審判の場 (the bar of final judgment) を彼らの婚礼の祭壇 (their marriage-altar) とする」ことを、ヘスタは妄想せずにいられない。ヘスタ自身は、「そのような考えを大急ぎで地下牢に閉じ込めて」、ボストン永住の動機をあくまでも「恥の象徴」として生まれ変わるためであると、自分に強く言い聞かせる。しかし、語り手は、それを、「半ば真実、半ば自己欺瞞」(half a truth, and half a self-delusion) である、と裁定する (80)。

「半ば真実、半ば自己欺瞞」と表現されるヘスタの心的なポーズは、フロイトが「否認」(disavowal) と呼ぶ、フェティシズムに特有の心的な態度に重なる。先に触れたように、「否認」とは、エディプスの機制に関わって、母的去勢を承認し、自らの象徴的去勢を受容しつつ、なおも欲望の対象(母のファルス)の現前を断念しない、という主体の心的なポーズである。フェティッシュは、母的去勢という事実の承認と、去勢されない母(ファリック・マザー)との同一化を欲望する主体の保持と、このふたつの矛盾する行為を両立させる「妥協」の産物であり、これを可能にする心的態度が「否認」である。

このことを踏まえて、ヘスタを捕らえている妄想に引き返すなら、そこにすでに、フェティッシュを特徴付けるレトリックが潜んでいることがわかる。最後の審判において自らの欲望に「父＝神の名／否」が宣告されることをヘスタは承認するが、それは同時に、「未来永劫の天罰を二人ともに受け続けること」(a joint futurity of endless retribution) の享楽をヘスタにもたらずかもしれない。去勢の承認が、同時に去勢の否認でもあ

る、という意味で、ここには典型的なフェティッシュの心理的機制が働いているが、このことは、ヘスタの幻想の領分に留まらず、ヘスタの実際の行動の領分についても、そのまま当て嵌めることができる。ボストン永住と緋文字の着用の固い決意は、ヘスタが去勢されていることの揺るぎない証であることを、語り手は幾重にも証言してみせるが、その一方で、ヘスタのその決意は、彼女がディムズデルを欲望し続けること、ヘスタが去勢されていないことの確実な証左でもあることを、語り手は明言するのである。これと軌を一にして、続くパラグラフでは、「牧師の黒いヴェール」の主要テーマが姿を現す。ヘスタが住み着いた藁葺き小屋は、ボストン居留地の境界、海辺に位置するが、小屋の前には「この半島に唯一育つ、いじけた灌木の木立」があり、それは「小屋を人目から隠すというより、ここには隠しておきたい何か、少なくとも隠しておくべき何かがあることを、告げているように思われた」(A clump of scrubby trees … did not so much conceal the cottage from view, as seem to denote that here was some object which would fain have been, or at least ought to be, concealed) (81)。

ヘスタのボストン永住の決意とは別に、ボストン社会もまた、ヘスタのボストン滞留を必要としている。ヘスタの針仕事にたいする社会的需要の高まりは、ヘスタに「世間のなかで果たすべき役割」を与えるが、「自分が社会の一員であるかのように思い込むための機会は何ひとつなかった」。ボストン社会がヘスタに与える「役割」については、ホーソーンは、「[死後] 再びわが家を訪れたものの、見られることも触られることもかなわないう幽霊」に準えて語る (84)。その「役割」は、「人間的な共感の環の外に締め出された」(shut out of the sphere of human charities) (81) ものとして人びとの視界の外に追いやられるにもかかわらず、なおも「隠しておくべき何か」として木立の向こう側に現前するものとしての役割である。裁縫家としての社会的役割をヘスタに保証しているものは、「精緻で想像豊かな裁縫技術を示す商品見本」(a specimen of her delicate and

imaginative skill) (81) としての緋文字に他ならないが、その緋文字は、ヘスタのいわゆる社会的役割とは別の役割を、同時に、ヘスタに振り当てる。

第5章の流れを追えば、緋文字がフェティッシュ的な機能を帯び始めるとともに、ヘスタの針仕事自体が、ボストン社会のなかで「次第に、しかし速やかに」「流行」(the fashion) になってゆくプロセスが語られる。植民地の権力中枢に連なるものたちは、自らの政府の権威を誇示するために、ヘスタの針仕事を臆面もなく利用するが、ボストン社会の上層に限らず、ヘスタの針仕事にたいする人びとの執着は、「ありきたりの、何の価値もないものにさえ、実体のない法外な価値を与える病的な好奇心 (morbid curiosity)」も手伝って異様な高まりを見せ、花嫁衣裳を唯一の例外として、ボストン社会は、生活のあらゆる局面で、ヘスタの針仕事に頼るようになる (82)。

第2章では、ヘスタは、牢獄で縫い上げた極彩色の衣装を身にまとい、さらに人目を引く華美な刺繍を施した緋文字を胸に、裁きの広場に集まった黒ずくめの民衆のなかに断ち現れるが、その挑戦的なヘスタの姿は、もはやここにはない。ヘスタが「父たちの名／否」を受け容れて以降、第5章では、第2章のヘスタと民衆の関係は、少なくとも服飾の点では逆転しており、いまやヘスタ自身は、常に粗末な黒ずくめの衣装を身にまとい、「時間の大半を使って貧者のための粗末な衣服を作る」ことに専念しつつ、贖罪に勤しむ。高度な服飾技術を駆使する針仕事は、本来、「彼女の情熱を表出し宥める」手段でもあるが、彼女はその悦びをさえ罪とみなし、いわば余技として、人びとが求める絢爛たる服飾を「自分が決めた時間だけを使って」裁縫し、彼女の針仕事をボストン社会の隅々に流通させる (83-84)。

ヘスタの針仕事がボストン社会のなかでフェティッシュ化する経緯について、ホーソーンは簡潔に説明する：“Vanity mortifies itself by putting on, for the ceremonials of pomp and state, what have been

wrought by her sinful hands” (82-83) . この一文には、ふたつのメッセージが含まれる。そのひとつは、ヘスタの手になる衣装を身にまとうことは、換喩的には緋文字を身にまとうことに等しく、緋文字の向こう側に現前する欲望の対象との同一化の余地を残すこと、もうひとつは、ヘスタが「恥の象徴」として生まれ変わる以上、緋文字の向こう側にあるのは「欠如」でしかないことを人びとは承知していることである。

こうしてヘスタの針仕事は、ボストン社会全体を「否認」という心的機制のなかに巻き込んでゆくが、第5章において顕在化する緋文字のフェティッシュ性と否認のレトリックは、ヘスタの物語のそもそもの始まりから周到に用意されているともいえるし、物語の終局まで一貫して保持されるといってよい。

第2章で、ヘスタが獄舎から人びとの前に、読者の前にはじめて姿を現す場面では、警吏が彼女の肩に手をおいて彼女を民衆の前に引き出そうとするが、獄舎の敷居のところ、彼女は警吏の手を払い、「あたかも彼女自身の自由な意思によるかのように」(as if by her own free-will) (52) 前に進み出る。ボストンの法秩序にたいするヘスタの姿勢は、いわば二枚腰であり、彼女は法の裁きの正当性を躊躇なく承認し、「恥辱の象徴」である緋文字 A として法秩序のなかに登録されることを受け容れるものの、同時に、ヘスタは、法秩序を体現する父たちの命ずるところを、あたかもそれが彼女の自由意思による結果であるかのように振舞う。そのようにして、ヘスタは、欲望の自由を禁ずる法秩序に服しつつ、欲望する主体の自由を「かのように」という比喻のヴェールの向こう側に保持する。

ヘスタの緋文字を目にしたメイトロンの一人が発する非難、すなわち、象徴的去勢の徴であるはずの緋文字を、ヘスタが「彼女の優れた針仕事の腕前」を「見せびらかす」ための機会として利用し、「お偉方が罰として与えた徴を高慢の徴に掬り替えてしまった」という非難は、法秩序にたいするヘスタの二枚腰を、正確に見抜いている (54)。ヘスタは、物語の冒頭からすでに、緋文字をフェティッシュとして、民衆の前、読者の前、作

者の前に差し出すのである。

フェティッシュとしての緋文字の働きについては、物語が後半に入って、新たな展開を見せる。第13章は、『緋文字』の前半部と後半部を分ける境目におかれ、章の前段は前半部の総括に、後段は後半部の予告に当たる。

章の前段は、象徴的去勢の徴として緋文字が果たした役割を跡づける。緋文字は、ヘスタを「不倫女」(Adulteress)の換喩に仕立て、ボストンの法秩序のなかに彼女を登録するが、贖罪行為としての7年に渡る慈善活動を通して、AdulteressのAは、AbleのA、AngelのAへと換喩的意味を横滑りさせる。緋文字は、「慈善修道女」(a Sister of Mercy)としてのヘスタの身分証明として、貧困に苦しむ階層、疫病の蔓延する区域、災難に見舞われた家々に自由に立ち入る権利をヘスタに授ける。サクヴァン・バーコヴィッチのいう「ヘスタ・プリンの社会化」(the socialization of Hester Prynne) (*The Office* 38)を担う徴として、緋文字は恙なくその役割を果たしているかに見える。

他方、章の後段では、緋文字は、章のタイトルでもある「ヘスタのもうひとつの見方」("Another View of Hester")、端的には「女預言者」(a prophetess) (165)としてのヘスタの姿を浮かび上がらせる。緋文字はヘスタに「思考の自由」(a freedom of speculation)を授けるが、「大西洋の向こう側」を席卷する自由主義思想を吸収するヘスタにとって、もはや、「世界の法は、彼女の精神にとっての法ではなかった」(164)。「女性全体」にとって生きるに値する社会の実現のためには、「まずは、社会の秩序全体を解体し、新たに再構築しなければならない」(165)。同様の主題は、第18章冒頭のパラグラフにも現れるが、緋文字は「思考の自由」(a latitude of speculation)をヘスタに授け、「他の女たちがあえて立ち入ることをしない領域に立ち入るためのパスポート」(the passport into regions where other women dared not tread)の役割を果たす。このパスポートを胸に着けたヘスタは、「精神の荒野」(moral wilderness)を「野蛮なインディアンが森をさ迷うのと同じくらい自由にさ迷い歩き」、

「人間が作った諸制度」を「疎外された視点」から眺めて、それら「すべてをインディアン並みの敬意しかもたずに批判する」(199)。

ホーソーンはあえて「革命」という語を避けているが、ここで浮かび上がるのは、革命家ヘスタの姿であるといってよい。緋文字は、現秩序による去勢を受け容れ、現秩序のなかに「慈善修道女」としてヘスタを登録する一方で、象徴的去勢の根拠となる法秩序そのものを根こそぎ破壊する女革命家の現前を映し出す。

そもそも、フェティッシュにおいては、父の宣言する法を承認する裏側では、父の法そのものを解体する破壊的な衝動が蠢く。物語のプロットに従えば、ヘスタは「すべてを新しく始めよう！」(Begin all anew!) という声高な宣言とともに、物語の冒頭において封印した移動の自由を行使し、「偽りの人生を真実の人生と取り替える」ために、ディムズデルを伴ってボストン脱出を企てる(198)。「この徴とともに、過去をすべてなきものにする」(202)との宣言とともに、ヘスタは緋文字を投げ捨て、「素晴らしい解放感」(202)を味わいはするものの、結局、その計画はディムズデルの翻意と死によって頓挫する。彼の死後、ヘスタはパールを伴って旧世界に渡り、しばらくは消息を絶つが、再び単身でボストンに帰還し、「自らの自由意思によって」(of her own free will)「長らく捨ておいた恥の徴」を身に着ける(262 263)。結果として、女預言者としてのヘスタの現前は、あくまでもヴェールの向こう側の出来事として留めおかれ、女預言者としてのヘスタが、ヴェールのこちら側に立ち現れることはない。その可能性を、ヘスタは自ら破棄するのである。

こうした筋立を、急進主義、未来主義が主流を占めてゆく時代思潮にたいする、ホーソーンの保守的な身構えの反映として説明することもできる。フランス革命のトラウマがいまだに残り、なおかつ、ヨーロッパ各地で革命が起りつつあった19世紀の半ばのニューイングランドにおいて、革命にたいする批判的な言説が主流をなしつつあったことは、周知の事実である。他方、奴隷制度の即時廃止を求める風潮のなかで、ホーソーンが常に

否定的なスタンスを取り続けたことは、文壇における彼の孤立をさらに深めることになる。アメリカン・ルネサンスとして括られる時代は、1820年のミズーリ妥協によってアメリカ国内の決定的な分裂が回避されていた時代と重なり、それが実質的に失効する1850年代においても、いくつかの妥協的な施策が図られるが、ホーソーンを除いて、ニューイングランドの文壇は総じて、それらについてきわめて激しく否定的な態度をとった。アメリカ全体が内戦という破局に向かう時代、急進主義的な論調が双方において主流となるなかで、ホーソーンは漸進主義の立場を譲らず、妥協の重要性を擁護し続ける。この間の事情を検証しつつ、サクヴァン・パーコヴィッチは、彼の『緋文字』論のなかで、革命家としての「ヘスタの急進主義は either/or の政治学に基づいている」が、「ホーソーンの象徴的手法は both/and の政治学を要請する」と述べる (*The Office* 9)。そもそも、『緋文字』の物語はさまざまな形のもとに現れる二項定立によって支えられているが、それらは、詰まる所、緋文字という「象徴」の解釈をめぐる二項定立に帰せられる。パーコヴィッチのいう「ホーソーンの象徴的手法」とは、それらの対立項のいずれにも加担せず、あるいはいずれかに加担するにしても、「排他的、偏狭には」ならず、その対立を「漸次的に、抗争によってではなく相補的姿勢によって、全体を表象する」ものに仕立ててゆくプロセスを指す(13)。パーコヴィッチによれば、ヘスタのニューイングランド帰還は「Aの役割が社会化 (socialization) であることを明らかにする」のだが、彼が「ヘスタ・プリンの社会化」と呼ぶところは、単に、彼女がボストンの法に抗って自らの道ならぬ愛の正当性を主張することでもなければ、逆に、ボストンの法に服して自らの愛を否定することでもない(1988 1-2)。ボストン社会に復帰したヘスタは、あえて「二者択一」を避け、そのふたつを、あくまでも「選択肢として所有し続ける」ことを選ぶのである (*The Office* 21)。

フェティッシュとしての緋文字に戻るとすれば、ホーソーンが、第13章という物語の扇の要の部分で、あえてヘスタのなかの女預言者の出現を予

告し、第17、18章では、「すべてを新しく始める」ことを宣言する革命家ヘスタのこの上なく魅惑的なスピーチと見事なパフォーマンスを描き出しながら、第24章では、ヘスタをボストン社会に復帰させ、「恥辱と苦悩の重荷」(202)である緋文字を再び着用させる理由は、どこにあるのか。

父が宣言する法の秩序にたいするアンビヴァレントな心的態度がフェティッシュに付き物であるように、現秩序の解体と新秩序の構築の両方に関わる革命という主題もまた、法の秩序にたいして、相矛盾する姿勢を併せ含む。ヘスタの象徴的去勢を承認し、彼女が緋文字Aとして生まれ変わることを承認するためには、ヘスタの欲望にたいする「父たちの名／否」の正当性を承認しなければならない。フェティシストにとってのフェティッシュが、必ずしも魅惑の対象ではなく、ときに厳しい抑圧の対象でもあることは、フロイトが前掲論文のなかですでに述べているところである。かりに、革命の主体が、自らに「父の名／否」を宣告した現秩序を解体してしまうとすれば、次に彼／彼女がしなければならないのは、自らの欲望にたいして「父の名／否」を宣告する新たな法秩序を自らの手で樹立することである。しかし、象徴的去勢を通過しないディムズデルが、己の手で自らに「父の名／否」を宣告するために、どれほど空しい試行錯誤を続けるか、ホーソーンは、ディムズデルの物語を通して執拗に検証してみせる。

緋文字の向こう側に現前する欲望の対象は、本来、不在の対象である。ラカンが繰り返すいうところから従えば、欲望は、フェティッシュの向こう側にある対象の現前によって支えられるのではなく、その不在によって支えられる。

ヘスタに再び緋文字を着用させることは、ヘスタを再びフェティッシュの元へと引き戻すことを意味する。緋文字は、「ヘスタが文字Aの女として最終的に回心する」(Hester's final conversion to the letter) (Bercovitch 1988 11) ことを実現する一方で、自らを去勢する法秩序を転覆させる女としてのヘスタの現前を「ヴェールの向こう側に留めおく」。

まさにそういう形でのみ、ヘスタ自身のみならず、読者も語り手も作者もまた、彼女の「大文字の私」の現前を保留しつつ、欲望の対象をヴェールの向こう側に留めおきながら、同時に、欲望する主体としての「大文字の私」を「ヴェールの向こう側に留めおく」ことができる。

引用文献

- Baym, Nina. "Nathaniel Hawthorne and His Mother: A Biographical Speculation." *American Literature* 54 (1982): 1-27.
- Bercovitch, Sacvan. "Hawthorne's A-Morality of Compromise." *Representations*. Vol 24 (Autumn 1988): U of California P. 1-27.
- . *The Office of the Scarlet Letter*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1991.
- Diehl, Joanne F. "Re-Reading The Letter: Hawthorne, the Fetish, and the (Family) Romance." *New Literary History*. Vol. 19 No. 3 (Spring, 1988): The Johns Hopkins UP. 655-673
- Emerson, Ralph W. "Being and Seeming." *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson* Vol. II 1836-1838. Ed. Stephen E. Whicher, et. al. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard UP, 1964. 295-309.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Minister's Black Veil." *Twice-Told Tales*. Vol. 9 of the Centenary Edition. Ed. Roy Harvey Pearce, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. 37-53.
- . *The Scarlet Letter*. Vol. 1 of the Centenary Edition. Ed. Roy Harvey Pearce, et. al. Columbus: Ohio State UP, 1962. 3-264.
- . *The Letters, 1813-1843*. Vol. 15 of the Centenary Edition. Ed. Fredson Bowers, et. al. Columbus: Ohio State UP, 1984.
- Steele, Jeffrey. *The Representation of the Self in the American*

Renaissance. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1987.

フロイト、ジークムント 「フェティシズム」 石田雄一訳 『フロイト全集
19』 岩波書店 2010 275-82

———— 「性理論のための三篇」 渡邊俊之訳 『フロイト全集6』 岩波
書店 2009 163-295

ラカン、ジャック 「ヴェールの機能」 ジャック・アラン・ミレール編『対
象関係（上）』 小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳 岩波書店 2006年
191-208